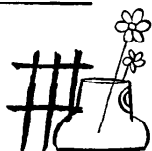


巻頭言



直感，情報の現象の海

木村 泉†



情報処理技術が深く社会に浸透しはじめたいま、それを支える優秀な情報処理技術者が多数必要であることは言をまたない。ここで「優秀」という中には、技術に対するしっかりした直感（ないしセンス）をもっている、ということが含まれる。現在のわれわれにとっては多分そこが一番重要といつてよいであろう。

プログラミング言語の文法をよく知っていて抜かりなく適用できるとか、システム設計技法に習熟していて各種の図式がすらすらと描けるとかいった技能、知識の面も重要には違いない。だが技能や知識は、背後の直感があってはじめて的確に運用できるものである。直感抜きで技能ばかりを振りかざす技術者は、ちょっと周囲の条件が変わるとたちまち馬脚をあらわす。

直感のない人は、重要な戦略的意志決定においてその重要性を見落とし、とっさの判断を誤る。しかも「いや、それは違う。」とまわりの人が忠告したとき、「うんにゃ、なぜこれでわるいか。」とつっぱりたがる。直感がないから理屈でくる。基本的な仮定が間違っていることに気づかないで押しまくる。

わが国では、UNIX オペレーティング・システムのようなものはついぞ作られることがなかった。そのあたりでわれわれが後座を拝したのは、直感を軽んじる風潮があったせいではないだろうか？ UNIX（特にその初期の版）をとくと眺めてみると、その成功の大きな要因は開発者の直感の確かさにあった、ということに気づく。彼らは技術の最先端を追いはしなかった。当時すでに研究者の間では常識化していた技術群のうちからこれはというものを拾い集め、それに2、3の警拔なアイディアをつけ加えて、全体をすっきりとまとめ上げた。

彼らがした設計上の選択の多くは、しっかりした直感をもつ人なら誰でも「いわれてみればそうだね。」といったくなるようなものだった。一方それは、その必然性を直感のない人に納得させようとすれば、仮に

うまくいったとしても説得に疲れ果ててしまうだろうな、と思わせるような性格のものであった。

いまわが国では、UNIX を買ってきて（ちょっと日本語化などしてから）使うのがはやっている。だがそれはあくまで間に合わせである。情報処理技術が深く社会に浸透しはじめたいま、そんなことでは早晚利用者にそっぽを向かれる。UNIX に比肩し得る品質をもち、われわれの言語、文化にしっかりと根ざしたシステムを、われわれ自身で生み出してゆかなければならない時期がきている。そのためには深く対象に切り込んだ設計上の選択が、無数に必要である。そういう選択でものをいうのは直感である。

だからわれわれは直感の利く情報処理技術者を育てなければならない。それは一朝にしては育たない。時間を掛けて、気長に育てる必要がある。人は機械的現象や電氣的現象には、子供のころから接する機会が多い。機械工学や電気工学の技術者はそうやって手に入れた直感から出発できる点、得をしている。これに反して、情報処理技術の背後の現象は、少なくとも現状では、一般市民が接触する機会のまだ少ないものである。だから次代の技術者は、若いうちから「情報の現象」の海にたっぷり漬け込んで、直感を身につけさせる必要がある。

それにはそういう海、体験の舞台としての計算機環境、昨年9月号のこの欄の棟上氏の表現を借りればインフラストラクチャ（下部構造）の整備が急務である。筆者の身邊に引きつけていえば、情報関係専門教育機関の計算機をもっと充実させる必要がある。その点、筆者は現状を深く憂慮している。

棟上氏もいわれたように、インフラストラクチャのための投資は即効性にはとぼしい。だが若者が育て一人前に働きはじめれば、じわじわと効き出す。そしてその効果は永続する。あとから蕎麦張りには利かない。いま手当てをしておかないと必ず後悔する。

† 本会理事 東京工業大学理学部

(昭和61年6月2日)